

特集にあたって (特集 イメージと実態の中間層)

著者	濱田 美紀
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	204
ページ	2-3
発行年	2012-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003868

特集にあたって

「イメージと実態の中間層」

濱田美紀



この特集は、「中間層」について書いて下さい」というごく簡単な依頼に応じて書き集められた一五カ国の「中間層」に関するエッセイ集である。最近「中間層」という言葉が、新興経済、購買力、ポリウムゾーンなどと何かしらビジネスの色を帯びたものに固定化されてきたように思われたため、世界各国の中間層を横並びでみることで、さまざまな中間層の様子をみてみようということになった。「中間層」というお題に対して、一五カ国それぞれで異なった視点から様々な中間層像が描かれており、この違いこそ各国の「いま」を表しているのだといえる。興味深いのは、多くの筆者が中間層について書きながらも「中間層内部には大きなばらつきがある」ことを指摘していることである。中間層という言葉で、何かしらの人々をひとくくりにすることの違和感を、研究者たちが感じている表れであるともいえる。

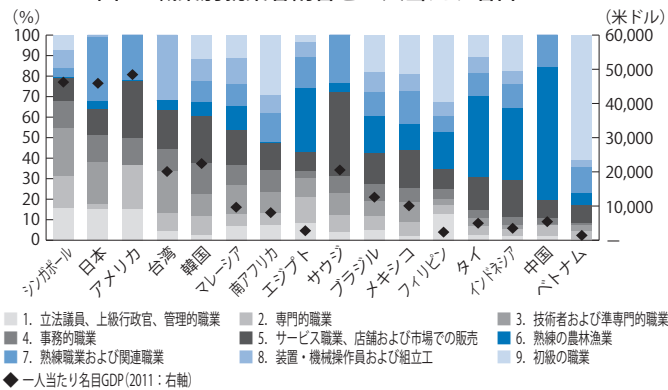
●ビジネスとしての中間層

中間層という言葉が頻りに耳にするようになったのは、二〇〇九年くらいからではないだろうか。そのころはBOP (Base of the Pyramid) という言葉がまだ耳新しく、巷ではBOPビジネスの特集がそこかしこで組まれていた。それまで援助対象としてしか映らなかった途上国を日本企業がビジネス対象とみなし始めた時期である。途上国の貧困層も購買力をもつというあたりまえの事実の発見によって、途上国が市場となったが、貧困層より購買力をもつ中間層を市場ととらえる方が、日本のハイエンドな製品を売り込むうえでは、よりクリアーなビジネスモデルを描ける。そこで、さらなるビジネスチャンスとして（富裕）中間層が、「アジアを内需に」という掛け声とともに注目され始めた。二〇〇九年版通商白書で示された中間層の定義は「世帯可処分所得が五〇〇一ドル以上三万五〇〇〇ドル以下」であった。

●中間層とは誰か？

Middle Classに対応する中間層、中流、中産階級が指すものは、時代や分野よって変化する。従来、自営業者などが中間層として定義されていたが、経営・管理職、専門・技術職などのホワイトカラーの存在が大きくなるにつれ、従来の中間層と区別され新中間層として位置づけられるようになった。では、各国の中間層はどのくらいの割合だろうか（図1参照。比較のために日本とアメリカも加えている）。ホワイトカラーに相当する職業の割合の多い順に並べているが、およそ経済規模（一人当たり名目GDP）と対応している。経済発展のレベルに応じて経済構造も変化し、ホワイトカラーとグレーカラーが過半となっている国では、もはや中間層となることは目的ではなく、関心は中間層のなかでいかに上に浮上するか、もしくは

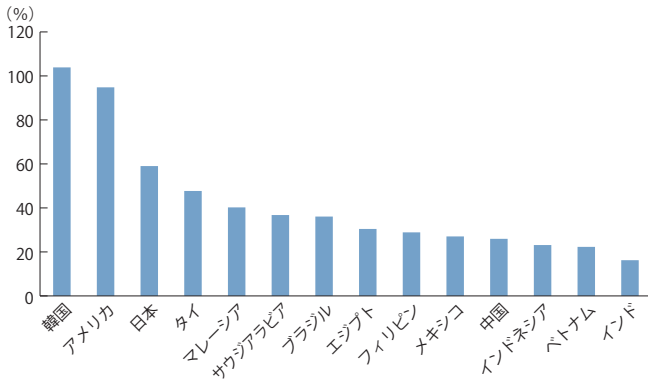
図1 職業別就業者割合と一人当たり名目GDP



(注) 1) インドはデータなし。
2) 中国・ベトナムは2005年、エジプトは2006年、ブラジルは2007年、その他は2008年の数値。
(出所) ILO, Labour Statistics Database.

はいかに中間層から脱落しないか、という二方向に分化していると思われる。特に中間層の瓦解は、アメリカをはじめとした先進国で問題になっており、本特集でも「中間層はいま、崩壊の危機に直面している」で始まる台湾では、創業機会を失った自営業者からなる旧中間層が減少し、さらに新中間層も失業と所得の低迷に不安を抱いている。韓国も同様で、中間層は厚い層をなしているものの、アジア通貨危機後階層分化が進み、雇用に対する不安が付きまとっている。階層維持の決め手となるはずの高学歴も熾烈な学歴競争社会のなかでは（図2参照）、有効な手立てではなくなっている。

図2 高等教育就学率



(注) (1) 高等教育就学率=年齢にかかわらず高等教育機関の全入学登録者数を公式入学年齢人口で除した割合。
 (2) シンガポール、台湾、南アフリカはデータなし。
 (出所) World Bank.

● **イメージと実態のギャップ**
 この国でも「中間層」に対するイメージがあり、そのイメージと自分の実態とのかい離を、人々がどのようにとらえているかということが、各国の中間層の「いま」を表しているように思われる。おおよそのまとめとして、イメージされている中間層は、「都市に住む」「高学歴の」「裕福で」「国際的な」「若い」「二世代目」ということができるかもしれない。グローバル化のなかで、スタバでコーヒーを飲み、Facebookやツイッターで世界中と情報のやりとりをするというように、中間層のイメージもグローバルスタンダードになったのかもしれない。その(豊かな)都市エリート中間層と

自らの現状のかい離を埋めるには、経済成長という追い風が必要である。事実、経済新興国など活力のある国では、中間層のイメージは自分が追いつくべき理想であり、経済成長の波にのって実態をイメージに近づけることが可能だという明るい期待がみなぎっているように思われる。
 ベトナムの記事で描かれている中間層はこの典型であろう。高級で多様な食品を買い求めるベトナムの中間層は「消費者主義」と「上昇志向」に基づいて国際的なライフスタイルを実現しようとしている。ブラジルでも新中間層が将来的な所得上昇に対し高い期待をもつことから、将来所得を見込んだ信用を利用することで消費が旺盛である。インドネシアでは中間層をイスラームという視点からとらえ「イスラーム化が都市中間層の消費主義と手を携えて進行している様子」を映画という娯楽を通じて中間層文化の生成を描いている。
 一方、中国で紹介されているのは、自分がどの階層に所属するかを確認したい人々の様子である。市場経済化が進展するなか、自らの社会的地位を客観的に測ることは、豊かさにまい進する国の変化に自分が対応できているかどうかを確認する意味で必要なのかもしれない。メキシコの人々もまた自分たちの実態を外の力を用い

て確認している。自国の中間層に関する書物をアメリカから逆輸入するかたちで自らの中間層像と、さらに社会における重要性を確認している。

● **分化する中間層**

約二割と推定されるフィリピン
 の中間層は消費の主役ではあるが、その中には大きな格差がある。さらに経済的に中間層に分類される層は、中間という言葉とは裏腹に、フィリピン社会では少数派でしかなく、「中間的な階層」は、この少数派と極貧層の間の圧倒的多数派の低所得者層である。
 都市エリート中間層が卓越した存在であったタイでも、二〇〇六年軍事クーデター後、エリート中間層は二分されると同時に、地方中流層が生成されるなど階層構造が変化している。シンガポールでは絶対的な政府のもと、中間層は政治を忌避し、経済的な充足に自らをとどめているが、ここでもまた変容が始まっている。政府が異なる種類の中間層を創出したきたマレーシアでは、経済成長の過程で政府の意図しない中間層も生まれるなど中間層は多様であると同時に、世代間の関係もまた一様ではない。サウジアラビアでの中間層は国家の石油収入の分配の恩恵を受ける人々で、ほとんどが公務員であるが、ここでも近年中間層

の部分的な分解が懸念され始めている。一方、長年脆弱な存在ととらえられていたエジプトの中間層は、分解をきっかけ下位中間層の不満がエジプトの「アラブの春」を蜂起させた。下位中間層は、政治的・社会的のみならず、消費の担い手としても期待され始めている。南アフリカでは政策が「ブラック・ダイヤモンド」と呼ばれる黒人中間層を創出し、中間層の厚みを増してきたが、同時に黒人内部での経済格差の悪化も引き起こしている。
 結局、現在世界で注目されているのは、既存の中間層の上澄みのごく限られたエリート中間層であり、改めて中間層を観察するとその厚い層は所得の面からも政治的な立場からも上下に分解している、あるいはしつとあることがわかる。カースト制度の影響の残るインドでは、経済的な中間層は上位カーストが占めているが、そのインドでも中間層の流動化がみられ、下位中間層が次世代においても中間層である保証はないのである。
 (はまだ) みき/アジア経済研究所
 貧困・社会開発研究グループ

《参考文献》
 ①園田茂人編著「二〇一二」『勃興する東アジアの中産階級』勁草書房。
 ②服部民夫・船津鶴代・鳥居高編「二〇一二」『アジア中間層の生成と特質』アジア経済研究所。